徹し朝方の３時頃までステージでの演奏が続き、翌日の第二日目は眠い目を擦りながら夕方４時頃まで続くハードな音楽祭である。

ところで、東京川俣会は昭和20年代に設立して活動してきたが、昭和47年以降は休眠状態が続いた。その間、川俣会の開催を促す声も聞かれたが、機はなかなか熟してこなかった。平成の時代に入って女性パワーの、川俣会を開くことに対する熱意が功を奏して復活再開を前提とした準備会が開かれて、一年余の検討を重ね、過去にとらわれることなく新しい考えに基づいた新生の東京川俣会を立ち上げることとなった。平成３年に第一回大会を開催して以降毎年開催してきており、平成12年が第10回大会、平成14年には第12回大会が開催された。会員数は600余名が登録されており、大会への参加者は例年150名から170名の実績を数えている。平成12年と平成14年には190名を数えた。東京川俣会の運営は、その都度の大会参加費と大会協賛名刺広告費で賄い、年会費の徴収は行っていない。しかし、平成14年から大会運営協力費の名目で大会欠席会員にも一口1000円の呼びかけをして、通信事務経費などの補完に充当していく方針を打ち出した。

東京川俣会は、郷土会としての郷里出身者の親睦を旨としており、郷里川俣や福島県の文化の紹介にも努めている。これまで大会の都度配布してきた文献コピーは、第一回の「川俣の方言」にはじまり「川俣の歴史－写真集－」、「大正時代の絵師による川俣の鳥瞰図」、「アサヒグラフ　山あいの要塞川俣町の繁栄」、「原郷のこけし群－西田峰吉コレクション」「川俣の昔ばなし」の抜粋などである。また川俣町出身者の音楽演奏会、書道展、絵画展、陶芸展などの案内紹介などにも努めている。

東京川俣会は東京在住川俣出身者の熱意に絆されて立ち上がった経緯があり、会員相互の親睦に徹し、会員中心の組織の集まりであることの性格が色濃く反映している郷土会としての親睦会である。

（常任相談役）

# 安積高校 東京桑野会の紹介

東京桑野会 副会長　水　口　　禎

〈東京桑野会のあらましと活動〉

①桑野の母校に学んだという共通の経験に結ばれた同窓の親睦の会であること

②会員はみんな仲良く相親しみ楽しい会であること

③何らかの意味で会員の頼りになるような面もある会であること

という、澤田会長（現名誉会長）提唱の三箇条ともいうべきものが、東京桑野会のすべてを言い尽くしています。

会の名前でもある桑野というのは、母校が創立（1884年・明治17年）の五年後福島市から移転した当時の村の名（現郡山市）です。因みにその新校舎は1889年（明治22年）、パリのエッフェル塔と同じ３月30日に完成しました。1977年（昭和52年）には国の重要文化財に指定され、現在は安積歴史博物館として公開されています。

東京桑野会の会長は古川清氏（63期）。アイルランド、オマーン、ルーマニアなどで特命全権大使を勤められた外交官で、前宮内庁東宮職東宮大夫です。会員は、福島県立安積中学校と安積高校に在籍した首都圏在住のすべての人を含みます。

会の運営は、会員からの年会費で賄われます。そのための媒体として、会報が大きな役割を果たしています。

会報は会のメインイベントである総会・懇親会開催通知を兼ねて、毎年年度始めの4月に発行、会員に配付されます。出席の方には、事前振り込みまたは当日に納入。欠席者は別途年会費のみ振り込みをお願いしています。この繰り返しての地道な実績により、昨年の実績は約700名から年会費の納入を戴きました。これも本会会報配付の効果と、会員諸兄の協力に感謝する次第です。

併せて、会の運営に関する諸業務とそのための事務局の場を提供頂いた歴代の幹事長にお礼を申し上げます。

〈総会・懇親会の開催と会報の発行〉

日常活動の目玉は、年一回の定期総会・懇親会の開催と、会と母校と会員とを結ぶ会員寄稿による会報の発行です。並行して同種の会の永遠課題とも言うべき、名簿の整備も重要な日常の活動です。現在は本会のホームページを準備中で、2003年度内には開設の予定です。

定期総会は年度始めの5月に、本会竹花顧問の尽力により新緑の目白椿山荘で開催されます。例年200名ほどの出席、1994年の母校創立110年を記念する総会には、中井会員のお嬢さんのタレント中井美穂さんの特別参加による総合司会で大変に盛り上がりました。来年は創立120年の節目に当たり、記念総会にはマル秘の目玉を企画中です。

会報は1982年（昭和57年）の創刊以来20年間、年２回発行の年もありましたが、現在は原則年一回４月に発行。今年2003年で第25号になります。制作と発送の費用の一部として会員他の協賛広告も重要な財源です。

発行部数は5,200部、うち会員発送3,800部、母校に1,200部。兄弟桑野会（青森、岩手、仙台、大阪）、東京花かつみ会（安積高女、安積女高同窓会）などへ贈呈。国会図書館と福島県立図書館へも納入しています。

この長い間には実に多くの方からの寄稿と協賛広告に支えられてきました。創刊号から24号まで、延34名による表紙・イラスト、延428名の寄稿（盟友安積女子高校卒業生の方からも多くの寄稿を頂きました）、延368件の協賛広告を寄せて下さった各位に感謝します。広報部企画による座談会は６本。

〈表彰のこと〉

母校の正門を入ったところに、彫刻家佐藤静司氏（45期）制作の明治・大正・昭和の３代の生徒を表現した「安積健児の像」が建っています。それを同氏に依頼しレリーフに作成していただき、会から現在まで勲一等を叙勲された会員３氏に贈りました。

澤田悌氏（42期、元日銀理事、国民金融公庫総裁、公正取引委員会委員長、日本住宅公団総裁）と高瀬禮二氏（46期、弁護士、元東京高検検事長）と坪井栄孝氏（58期、日本医師会長、世界医師会長）の各氏です。

〈甲子園のこと〉

「甲子園」については、準優勝という素晴らしい実績の磐城高校や、何度も直接出場を阻まれた福島商業などには大きなコンプレックスを持って来ましたが、2001年の「21世紀枠」で春の選抜初出場を果たしました。たまたま、元母校恩師小塚光治先生が創立された神奈川県代表の強豪桐光学園と同時初参加という因縁。もしやと期待された初出場同士の初対戦は幻に終わりました。

〈男女共学のこと〉

埼玉県とともに公立校では、少数派ながら男女別学が存在した福島県も紆余曲折を経て2001年度から全ての県立高校で男女共学が実施されました。その結果として３年後には当会にも初めて女子卒業生の後輩を迎えることになります。総会・懇親会での会員諸氏の期待と戸惑いが今から楽しみです。実は本会会報では一足早く、24号にはすでに初の女子新入生（117期）２名からの寄稿を頂いています。